

## 神様から与えられた機会

イザヤ書 41 章 10 節

使徒言行録第 24 章 24～27 節

使徒パウロの命をかけた伝道活動は私たちがよく知っているところです。主イエスに出会う前にパウロはキリスト者を迫害していましたが、ダマスコ途上で復活なさったイエス・キリストに出会い、キリスト者になり、眞の救い主こそあなたたちが十字架で殺した神の子イエス・キリストであるとユダヤ人に向かって大胆に伝える者になりました。また、地中海の周辺を3度も回りながら、異邦人の世界に福音を述べ伝えました。

伝道活動においても使徒パウロの業績は大きなものですが、何よりもキリスト教の神学、教理的な論理をしっかりと確立したのは使徒パウロによってだと言うのも、過言ではないのです。信仰義認というキリスト教の真髄の教理的な思想を明らかにしたのもパウロです。学問的にも優れた実力をもっていた彼はその賜物を生かして、イエス・キリストが示してくださった福音がどのようなものであるかを論理的に記しているのです。生前イエス様に出会ってはいませんが、使徒と呼ばれていました。また、自分自身も自ら使徒であることを確信していました。パウロは特に異邦人伝道に強い使命感をもっていました。その福音伝道における情熱は、当時世界の中心だとも言われたローマにまで向かっていました。

怖いもの知らずのパウロの福音伝道に対する熱心は、ユダヤの指導者たちの反感を買い、ついには使徒パウロは殺されそうになります。その勢いがいかに強いものであったかは使徒言行録 23 章によく表れています。

しかし、使徒パウロは恐ろしい現実の中でも、恐れていませんでした。なぜならば、主が共におられたからでした。主がいつも彼を支えてくださったので、牢に入れられている囚人であっても、たじろぐことなく大胆に福音を伝えていました。

今使徒パウロはローマの総督フェリクスのところ監禁されています。なぜならば、パウロはローマの市民権をもっていたので、総督として彼を殺そうとするユダヤの人々からローマの市民を保護する任務があったからです。パウロは牢に捕えられている囚人でありましたが、総督フェリクスは個人的にパウロに関心をもっていたようです。何よりもパウロが述べ伝えている福音がどのようなことであるかに好奇心をもっていたようです。それは、ユダヤ人であるフェリクスの妻ドルシラの影響もあったのではないかと考えられます。ドルシラはフェリクスの三番目の妻でした。彼女はユダヤの王ヘロデの娘で、シリアの領主の妻でした。しかし、フェリクスは若くてきれいな彼女をその夫から奪い、自分の妻にしたのです。このようなことは洗礼者ヨハネを殺したヘロデ・アンティパスとヘロデヤの場合とよく似ています。自分の兄弟の妻を無理やりに自分のものにした（マルコ 6 章 14 節以下）ヘロデに、洗礼者ヨハネはそのことが律法に反していることを強く指摘したので、王ヘロデはヨハネを殺すことになるのです。欲望のままに、ときには政治的な手段として、力によって成した結婚の様々な姿から当時の権力者たちの墮落がどのようなものであったのかが分かります。

ローマの総督フェリクスは、もとは奴隷の身分でしたが、それにもかかわらず、貴族の家門に属することができました。人間的にとっても賢い人だったのです。彼はイスラエルの総督になると、ユダヤ教の熱心な信徒に対する迫害を強め、また反乱を起こすユダヤの人々

を徹底的な残忍さをもって抑えようとししました。

ユダヤの歴史家ヨセフスは「総督フェリクスが十字架につけた反乱軍と反乱軍を支持した一般市民、そして、彼らのような処刑を受けた人々は数え切れないほどであった」と記しています。彼は残忍さを極め、あらゆる形で権力を振る舞い、力と富の欲望に溺れた奴隷の根性をもった人でした。しかし、このような人にも神様は恵みをほどこし、偉大なる使徒パウロを彼のもとに送ってくださったのです。

フェリクスも使徒パウロに好感をもっていただけで、囚人として監禁はしていたものの、寛大に扱い、ときには妻ドルシラと共にパウロをたびたび呼び出し、パウロの話の間を聞こうとしたようです。そこにはパウロからお金をもらおうとする下心もあったのです。使徒パウロには彼を助け、支えようとする人々から献金が送られてきたからです。パウロはフェリクスにそれを使い、福音を述べ伝える機会を作ろうとしたようです。フェリクスはそのわいろに心が向いていたのでしょう。

しかし、使徒パウロの話は甘いものではなかったのです。洗礼者ヨハネが王の罪を徹底的に指摘したように、パウロはその二人に向かって、神様の正義が何であるか、また、節制した生き方が何であるのか、必ず来るべき神様の裁きについて語りました。それを聞いたフェリクスは恐ろしくなりました。心にパウロの言葉が届き、揺れ始めたのでした。自分勝手に生きてきた人間の罪悪感に触れてしまったようです。誰よりも人間的に賢く、自分の立場を守るためにはどのような手段であっても、どのような目的であっても選ばず、上がってきた人間がパウロの言葉によって根底から崩れるような不安感に襲われてしまったようです。彼はパウロに言います。「今回はこれで帰ってよろしい。また適当な機会に呼び出すことにする。」

命をかけて語られた使徒パウロの力強い真理の証しに心が揺れながらも、フェリクスは人生のやり直しができる、真理と真の愛を知る機会、悔い改める機会、永遠の命を得る救いの道をつかむ機会を失ってしまったのです。神様が与えてくださった機会、死と裁きから解放される自由と喜びを自分のものにすることができる機会を逃してしまったのです。目の前のわずかなお金に捕らわれ、人生において最も大事なものを失ってしまった悲劇の主人公になってしまいました。

神様は偉大な使徒を彼のもとに送って下さり、個人的に福音に接する絶好のチャンスを与えたにもかかわらず、フェリクスは永遠なるものを見ることができず、目の前の見えるものに捕えられて、人生において最も大事なものを失ってしまったのです。彼は神様の救いよりお金の方を選びました。心の底から聞こえてくる神様の御声、魂の揺れを感じながらもそれを無視し、目に見えるものに執着してしまっていたのでした。彼は神様から与えられた恵みの時間を無駄にしてしまった惨めな人間になってしまいました。

その後、彼は何年も経たないうちに総督の座から落とされてしまうのです。フェリクスの圧政に苦しんだユダヤ人たちはローマ政府に代表を送り、フェリクスの悪政と自分たちの鬱憤を訴えたのです。それで、ローマ政府はフェリクスをローマに召還し、処罰をしようとししました。彼の兄のお陰で命は助かりましたが、遠方に送られて惨めな人生の最期を迎えたようです。

私たちの人生においても神様が与えてくださる恵みの時間、機会があります。福音を受け入れる機会、悔い改める機会、また、キリスト者である私たちにとっては信仰によって決断をしなければならない時があるのです。私たちにはいろいろな形で神様から与えられた機会があるのです。

愛せない人を愛する機会、許せない人を許す機会、神様よりも執着しているもの、神様よりも優先になっているもの、それらを捨てる機会、今こそ与えられている信仰的なチャンスがあるのです。それはときには、しやすいことではないかもしれませんが。その機会を掴むためにときには私が握っていたものを手放さなくてはならない、危機感や不安感まで感じさせられる現実があるかもしれない。しかし、フェリクスのように負けてはいけません。「今回はこれでよろしい。また適当な機会に・・・。」そう言うてはいけません。今こそ、主に応える時間です。

神様が私たちにあたえてくださった機会は、ときには辛いことであり、痛みを伴わなければ成し遂げることができないことであるかも知れません。しかし、確かなことは、それが神様からの恩寵のチャンスであるということです。

わたしたちは今、教会で共に礼拝を守ることができない異常な状況に置かれています。全人類が苦しむ時代を生きています。しかし、この試練の中で神様から与えられているチャンスがあるはずで、家族に私の信仰の背中を見せるチャンス、み言葉と祈りを深めるチャンス、そして神様を愛する機会、隣人を愛する機会、教会を通して与えられている私の使命を確認する機会、神様に心に向けて各々が神様からの御声を聞く機会であるのです。

皆さんと私はフェリクスのように神様がくださった大きな恵みの機会を目に見えるものに捕らわれ、失ってしまう悲劇の主人公にはなりたくないのです。その恵みをしっかり掴み、祝福された者として歩みたいものです。

各々神様からのみ声に耳を傾け、そのみ声に真実に、真剣に応える機会になることを願います。